

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 27 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24320174

研究課題名(和文)感情と実践 - 開発人類学の新たな地平 -

研究課題名(英文)Emotion and Practice : New Direction of Development Anthropology

研究代表者

関根 久雄 (SEKINE, Hisao)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：60283462

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,100,000円

研究成果の概要(和文)：認知科学において、感情喚起のプロセスを理解する理論に認知的評価というものがある。感情は自己と事象の関連性に関する主観的評価によって生じるというものである。つまり、事象 認知的評価 感情という流れがあり、感情表現は評価や解釈の表明ということである。重要なのは感情をどのように理解するかということであり、そのことを実践に結びつけることである。本研究では、感情社会学及び人類学における議論を手がかりにその点に関する文献研究を行い、それをふまえてオセアニア、東南アジア、ラテンアメリカにおける具体的な事例に関する民族誌的記述を通じて、開発に関わる人々の感情「管理」と開発実践の成果との連続性について例証した。

研究成果の概要(英文)：In cognitive science, there is the cognitive evaluation as a theory to understand the process that emotion arouses. It is that emotion is generated by subjective evaluation concerning the relationship between the self and the object. That is, there is a trend such as "object cognitive evaluation emotion," and emotional expression means the outcome of evaluation and interpretation. The important point is how we understand such emotion in the context of development. If there is not such process of thinking, we can't link emotion with the proper practice. In this research project, we study previous works on the emotional sociology and anthropology, and then exemplified the continuities between the people's management of their emotion and their development practice.

研究分野：文化人類学

キーワード：開発人類学 感情 援助 実践人類学

1. 研究開始当初の背景

(1) 開発研究とリアリティ：社会開発や人間開発に係る実践において、1990年代以降、調査者あるいは実務者が可能な限り支援の対象となる人々の目線に近づきながら「リアリティ」を捕捉することの重要性が指摘され続けている。開発プロジェクトの受益者たる人々の「ありのまま」の姿を理解すること、たとえばそのことが究極的には外部者には不可能なことであるとしても、可能な限りそのことに近づくことが真に意味のある「開発」に不可欠であるという姿勢である。そのような姿勢の提唱者の1人でもある R. チェンバースはそのリアリティについて、外部の専門家による科学的客観的事実というよりは、「個人の解釈によって形成される事実」と述べている。リアリティを捕まえた上で社会開発プロジェクトを進めることは、少なくとも理念的には今や常識化し、一部では PRA や PLA などの用語や参加型と称される実践ツールのもとで行われている。

(2) 人類学と「感情」：人類学において感情を正面から取り上げる契機となった研究は、フィリピン・イロンゴットで調査を行った M. Rosald の *Knowledge and Passion: Ilongot Notions of Self and Social Life* (1980) である。ロザルドは、異文化の出来事を象徴論的に捉えるのではなく、「同じ人間」としてもつ感情の揺れ動きの中で把握しようとした。それは日常的な相互関係の中に埋め込まれた行為として感情をみる見方である。そのことに関連して C. A. Lutz と L. Abu-Lughod (eds) も、*Language and the Politics of Emotion* (1990) において、心理人類学における本質主義的な感情研究を批判し、社会的な相互行為の中で立ち上がってくる感情に関わる言説の束に注目することの重要性を指摘している。それまで、一般に人類学の研究課題として感情を取り上げることとは、デュルケームが感情を、流動的で混合

的であり、容易には定義づけることができず、ゆえに分析対象とはなり得ないと警告して以来回避の対象とされてきたが、感情が社会的文脈において文化的に構築されるものとするアプローチが感情経験の社会的・認識的次元に対する注目を喚起することとなった。

(3) 開発のリアリティへ：開発プロジェクトをめぐる諸事象を構成し再構成する要因の一部として、文化的構築物としての個人的主観（「感情」）を認識しそれに注目することは、開発研究において人類学が果たしうる領域の一つと言える。冒頭で述べた開発におけるリアリティの否定的実情を克服するためにも、より深く現地の社会や人々の開発をめぐるリアリティを把握することは不可欠である。そのためには、そのような生きられた感情に注目し、社会構造やシステムに縛られない主観の世界（「感情」）と「社会構造やシステムにくるまれた主観の世界（「行為」）との間の社会・文化的メカニズムを捉え、それぞれの地域の開発に関わる感情経験の文化的特徴を明らかにすることが求められている。

2. 研究の目的

本研究は、開発や開発援助の文脈における人々の「感情」に注目した実践的人类学の可能性を検討することを目的とする。ここでは、ODA、NGO の海外における実践や国内での広報、啓発活動を含むさまざまな開発事例に関係する人々の行為や思考、語りに現れる感情を、感情語（例えば「怒り」「悲しみ」「やる気」など）によって示される一般的・抽象的レベルだけでなく、その元にある個々の生きられた感情経験そのものにおいて捉えることである。

本研究は、開発研究一般に対してこれまで「人類学」が提唱してきた批判的な視点を刷新するだけでなく、人々の「感情」に配慮した新しい開発支援の方法を実務者等に提示することである。これを実現するために、(i)

特に民族誌に現れる感情に注目しながら先行研究を検討する、(ii)フィールドワークを通じた具体的な「開発と感情」事例の研究、(iii)諸事例を比較検討し、「開発と感情の人類学」の試行的構築をおこなう、(iv)研究成果を開発プロジェクト実務者等へ還元する。これら4点を本研究期間における到達目標とし、感情への人類学的アプローチを、開発研究や開発実務の中に明確に位置づけることを最終目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者のほかに、開発人類学を専門とする4名の研究分担者を交えた計5名による共同研究である。

本研究を進めるにあたり、以下の4分野の活動を行った。

- (1)文献研究：感情の社会性、文化性に関わる先行研究を、主に社会学の観点から整理した。
- (2)実地調査：開発プロジェクトおよび開発援助に関わる人々の「感情」に注目した海外・国内調査を実施した。調査地域はオセアニア(関根)、東南アジア(小國、白川、内藤)、ラテンアメリカ(藤掛、内藤)であり、対象となる事例は、NGOによる生業改善活動、地域社会組織による農村開発活動、プロブア・ツーリズム(貧困克服のための観光事業)、ODA ボランティアによる村落開発活動、農村生活改善活動である。
- (3)研究会および学会発表：国立民族学博物館共同研究会「実践と感情 - 開発人類学の新展開 - 」(代表・関根久雄)の機会を利用して計11回の研究会を開催した。また、日本文化人類学会第47回研究大会(慶應義塾大学)における分科会「感情と開発 - 人類学における応用的実践の新展開 - 」(代表・関根久雄) および国際開発学会第24回全国大会(大阪大学)における企画セッション「開発実践と『感情』 - リアリティをめぐ

る新たなアプローチの可能性 - 」(代表・関根久雄)を企画し、成果の公表を行った。
(4)成果の一般公開：研究代表者及び研究分担者のほかに本研究課題に関心を寄せる他の国内研究者と共に、本研究の成果を株式会社春風社から商業出版(関根久雄編『実践と感情 - 開発人類学の新展開 - 』2015年9月刊行予定)の形態で公表する予定である。

4. 研究成果

研究代表者の関根久雄は、南太平洋の島国・ソロモン諸島の村落社会における小規模開発を例に、同国の村落社会における開発が常に人々の「怒り」の感情をめぐって行為や言語が選択されて実践されていることを指摘した。特にそこでは、妬みや嫉妬の怒り、市場的怒り、近代的無知の怒りに分類して例示し、ソロモン諸島人がどのようにして開発に関わる事態を前にして「怒り」を抱き、行為化させるのか、そしてそのような感情に関わる文化的管理の実践形態について述べる。基本的にソロモン社会では世帯や親族集団、村落社会は、「平等性の原理」と「他者への対抗意識(対抗性の原理)」という矛盾し合うかのような2つの原理のもとにあり、それらが社会を貫く価値としてある。近代の文脈に関わる事柄、とりわけ市場や現金収入といった経済に関わる事柄は容易に格差につながりうることであり、学校教育を通じて生じる近代的知識や経験の差異がその状況に拍車をかけることにもなり得る。「怒り」は、他者が自己よりも著しく傑出することを抑え込み、従来の平等性を維持しつづけようとする反応を示す感情である。これらは、ソロモン諸島における開発実践において、常に人々が怒りの感情に目を向け、直接開発の恩恵を受けない人々、あるいは開発プロジェクトなどに参加していない人々への「配慮」で怒りを予防したり、緩和させたりしていることを示している。

研究分担者の小國和子は、国家独立前からインドネシア南スラウェシ農村社会に存在した灌漑水路の水追人マンドロ・ジェネ(MJ)の存立背景と役割を確認し、開発実践において人的側面が「持続性」にどのように作用するのかについて、人々の「感情」を切り口に現地調査をもとに考察した。一般に MJ の社会的地位は低いものの、重労働に対する勤勉さに他の農民たちは共感し、敬意や畏怖の念を抱く。MJ は、土木的な観点からの水管理技術や人々を統合する権威的リーダーシップという「力」とは異なる、いわば人々の感情に訴え、人々の共感を誘うことで水管理に寄与してきた。小國はこのことを「情動的な技術」と呼び、そこに合理性を見いだす。しかし近年、MJ の役割をめぐる人々の認識は MJ 本人を含めて変化しつつあるという。勤勉さだけでは不十分であり、地方分権化の進行と共に重労働と敬意（共感、畏怖）とのバランスが崩れつつある。小國は、本事例をもとに、開発プロジェクト管理において、灌漑管理マニュアルなどに記載されることのない合理性をもつ感情経験の蓄積、すなわち情動的な技術の重要性を指摘した。

研究分担者の内藤順子は、チリ・サンチャゴ市における、プロプアー・ツーリズムという、開発途上地域の観光地とそこに暮らす貧しい人びとに利益がもたらされるように配慮した観光の実施過程に注目した。支援という実践が困難な境遇にある人びとへの「共感」や「共苦」に根差したものであるとするなら、感情を持つ人間として対象や関係者たちと関わり、それに応じてプラスやマイナスの関係性が生み出され、紡がれ、ときに衝突することは、実践過程において不可避である。内藤は、その実践現場において彼女自身に吐露された言葉や、彼女をも操作のコマとするような現地の人々の思惑、感情のせめぎ合いの起こる絶えず目まぐるしいアクチュアルで「人間的」な、全人的営みとしての開発現

場について、人類学者の下心ともいえる調査者としての感情も交えながら描きだした。

研究分担者の藤掛洋子は、パラグアイのある村において藤掛自身が 1993 年より生活改善プロジェクトに関わり、その結果、女性たちの青空市への参入、幼稚園や小学校の建設・運営といった多くの成功を生み出すに至った。しかし、2010 年頃からその村で複数の水準の情報が交錯する中で住民は感情のまつれや怒り、諦めなどによってコンフリクトを抱えるようになり、学校運営を巡りコミュニティ自体が分裂していったというその要因は、情報格差とそれを生み出した社会関係資本の減少、新自由主義的教育政策の影で切り捨てられる小規模小学校とそれに翻弄される教員・村人という構図が調査により浮き彫りになった。彼らにとって希望（成功）の象徴であった幼稚園や小学校も分裂の象徴となりつつある状況において藤掛は、コミュニティを再統合するためには、社会関係資本の再構築と共感の創造・再結合が必要であること、そしてそれは外部者が担いうることを指摘した。

研究分担者の白川千尋は、青年海外協力隊員を取りあげ、現地のカウンターパートなどと日常的な協働関係にある協力隊員が常に彼らとの間で「怒り」の感情を交わしていることを指摘する。白川は、田辺繁治のいう「情動のコミュニティ」、すなわち日常の対面的場面での共感的、情緒的關係のもとで互いに触発しあう関係を核として形成される社会に関する概念を援用し、支援の現場を一種の情動のコミュニティとして認識する。そこで「生身を晒し合う」中で採られる表現の 1 つが「怒り」であり、ネガティブなものとして捉えられがちな怒りの表出をともなったコミュニケーションが国際協力の活動にあたって現地の人々との信頼関係構築の契機となりうることを白川は指摘する。しかしここでは、コミュニケーションを可能とする範疇

に怒りをおさめることや、前提として相手への強い関心があること、双方の怒りの感情が共通の目的に向いているなど、表面化している感情のズレを調整する社会文化的規範を支援の現場において探り出す必要があることを結論として指摘した。

認知科学において、感情喚起のプロセスを理解する理論に認知的評価というものがある。感情は自己と事象の関連性に関する主観的な評価によって生じるというものである。つまり、事象 認知的評価 感情という流れがあり、感情表現は評価や解釈の表明ということである。重要なのはその感情をどのように理解したらよいかということであり、それがなければ実践に結びつけられない。本研究においては、当初感情社会学における議論を手がかりとしてその点に関する文献研究をおこない、さらにそれを参照しつつ、やがて「実践と感情」への人類学的アプローチへと研究代表者、研究分担者間で議論が展開した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

内藤順子、「小さき人びと」たちのプロジェクト：さまざまな他者の価値観のあいだを生きること、人文社会科学研究、査読なし、55号、2015、pp.217-233。

関根久雄、開発実践における人々の感情・フィールドワーカーの感情・国家と住民感情、民博通信、査読なし、144号、2014、pp.16-17。

内藤順子、貧困概念の悪循環について：チリにおける文化人類学的考察、査読なし、54号、2014、pp.79-94。

内藤順子、聖地サンチャゴ・デ・ポステラの現在：巡礼と観光をめぐる素描、交流文化、査読なし、14号、2013、pp.14-25。

関根久雄、感情経験・感情文化・「怒り」の管理、民博通信、査読なし、140号、2013、pp.13-14。

藤掛洋子、アクティブ・ラーニングによる「グローバル人材育成」を考える：パラグアイ渡航からの一考察、大学マネジメント、査読なし、9号、2013、pp.22-30。

藤掛洋子、支援とジェンダー：特集にあたって、国際ジェンダー学会誌、査読有、2巻、2012、pp.5-7。

〔学会発表〕(計23件)

内藤順子、地域社会を創る、早稲田文化人類学会第16回シンポジウム、2015年1月31日、早稲田大学戸山キャンパス(東京都新宿区)。

関根久雄、なぜ持続しないのか - ソロモン諸島における開発 NGO の実践と矛盾 -、国立民族学博物館共同研究会、2014年12月6日、国立民族学博物館(大阪府吹田市)。

小國和子、アクション・リサーチを通じた相互作用機会の創出 - 農民による地域固有の持続的灌漑管理実現に向けて -、国際開発学会第25回全国大会、2014年11月30日、千葉大学(千葉県千葉市)。

関根久雄、落胆と「成果」 - 太平洋島嶼と青年海外協力隊、JICA 研究所共同研究会、2014年5月26日、JICA 研究所(東京都新宿区)。

関根久雄、Alienated Provincial Residents: Public Sphere of Development in the Solomon Islands、International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES)、2014年5月15日、幕張メッセ(千葉県千葉市)。

内藤順子、宗教人類学の再創造：チリ・メキシコ・スペインの近現代宗教制度について、国立民族学博物館共同研究会、2014年3月2日、国立民族学博物館(大阪府吹田市)。

藤掛洋子、グローバル人材育成と青年海外協力隊の「役割」、国際ボランティア学会第15回大会、2014年3月1日、早稲田奉仕園(東京都新宿区)。

小國和子、共感と合理 - 南スラウェシ農村の灌漑管理における水追人マンドロ・ジェネの事例より -、国際開発学会第24回全国大会、2013年11月30日、大阪大学(大阪府吹田市)。

内藤順子、聖地空間の〈おもてなし〉をめぐる一考察、九州人類学研究会(日本文化人類学会九州・沖縄地区懇談会)、2013年10月26日、基町町民会館(佐賀県三養基郡基山町)。

関根久雄、つなぐ - 開発人類学の認識論 -、早稲田文化人類学会第16回研究集会、2013年7月13日、早稲田大学早稲田キャンパス(東京都新宿区)。

内藤順子、スラム観光の実施をめぐる感情的葛藤：チリ・サンチャゴ市の事例から、日本文化人類学会第47回研究大会、2013年6月9日、慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区)。

小國和子、手段として/目的としてのフィールドワークにける応答性、日本文化人類学会第47回研究大会、2013年6月9日、慶應義塾大学三田キャンパス(東京都港区)。

関根久雄、怒りを「管理」する - ソロモン諸島における開発実践と感情経験 - 」、日本文化人類学会第 47 回研究大会、2013 年 6 月 9 日、慶應義塾大学三田キャンパス（東京都港区）。

藤掛洋子、連帯から分裂へ - パラグアイ農村部における国際協力活動より - 、国立民族学博物館共同研究会、2013 年 3 月 2 日、国立民族学博物館（大阪府吹田市）。

白川千尋、感情と信頼関係 - 青年海外協力隊の事例より - 、国立民族学博物館共同研究会、2013 年 2 月 2 日、国立民族学博物館（大阪府吹田市）。

藤掛洋子、国際協力の実践と研究の往還を超えて：パラグアイとの 20 年間の関わりを振り返る、国際ワークショップ「グローバル支援のための実践人類学」、2012 年 12 月 15 日、国立民族学博物館（大阪府吹田市）。

藤掛洋子、グローバルな互惠性の構築：パラグアイ農村の若者の変化とパラグアイを支援する学生 NGO、国際開発学会第 23 回全国大会、2012 年 12 月 1 日、立教大学池袋キャンパス（東京都豊島区）。

関根久雄、可能性としての人類学的評価 - 線的視点による叙述的解釈の応用、国際開発学会第 23 回全国大会、2012 年 12 月 1 日、神戸大学（兵庫県神戸市）。

小國和子、共感と合理：インドネシア南スラウェシ農村灌漑の「水守り人」の意義と昨日を事例に考える、国立民族学博物館共同研究会、2012 年 10 月 13 日、国立民族学博物館（大阪府吹田市）。

関根久雄、「怒り」を管理する - ソロモン諸島における開発実践と感情経験 - 、国立民族学博物館共同研究会、2012 年 9 月 29 日、国立民族学博物館（大阪府吹田市）。

⑳ 白川千尋、青年海外協力隊をめぐる支援活動、日本文化人類学会第 46 回研究大会、2012 年 6 月 23 日、広島大学（広島県東広島市）。

㉑ 関根久雄、人類学的評価という協働 - ある「支援」の試み - 、日本文化人類学会第 46 回研究大会、2012 年 6 月 23 日、広島大学（広島県東広島市）。

㉒ 内藤順子、観光地の先住民をめぐる人類学的考察、マレーシア学会関東地区例会、2012 年 4 月 28 日、立教大学新座キャンパス（埼玉県新座市）。

〔図書〕（計 5 件）

白川千尋 他、杏林書林、国際保健医療学（第 3 版）、2013 年、302 頁。

小國和子 他、ミネルヴァ書房、福祉社会の開発 - 場の形成と支援ワーク - 、2013 年、316 頁。

関根久雄 他、風響社、グローカリゼーションとオセアニアの人類学、2012 年、338 頁。

関根久雄 他、はる書房、共在の論理と

倫理 - 家族・民・まなざしの人類学 - 、2012 年、467 頁。

関根久雄 他、昭和堂、オセアニアと公共圏 - フィールドワークからみた重層性 - 、2012 年、274 頁。

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

関根 久雄 (SEKINE, Hisao)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：6 0 2 8 3 4 6 2

(2) 研究分担者

小國 和子 (OGUNI, Kazuko)
日本福祉大学・国際福祉開発学部・准教授
研究者番号：2 0 5 1 3 5 6 8

内藤 順子 (NAITO, Junko)
早稲田大学・理工学術院・専任講師
研究者番号：5 0 5 6 7 2 9 5

白川 千尋 (SHIRAKAWA, Chihiro)
大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授
研究者番号：6 0 3 1 9 9 9 4

藤掛 洋子 (FUJIKAKE, Yoko)
横浜国立大学・大学院都市イノベーション
研究院・教授
研究者番号：7 0 3 8 5 1 2 8